

Title	賈宝玉を通して見た『紅樓夢』の思想
Sub Title	Hóng Lóu Méng and Ku Pao Yü
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.281- 292
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0281

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

賈宝玉を通して見た『紅樓夢』の思想

村 松 暎

兪平伯は一九五四年『新建設』三月号の「紅樓夢簡論」に「紅樓夢の中心思想は色空だ」と書いて、いわゆる紅樓夢論争の中ではげしく非難攻撃された。この兪平伯に対する批判の論点是要約すれば「紅樓夢に時代的制約によって存在する色即是空といった退嬰的落後的性格のみを見て、積極的な反封建的性格を見落すのは誤りである」ということであった。この問題について、私は『芸文研究』第五号「紅樓夢論争に対する批判」で論じたので、ここで再び触れることは避けるが、論争における論者には総じて都合のいい部分を取出して反封建闘争といった勇ましい掛声をかけるものが多く、その割には内容的な掘下げが不足していた。『紅樓夢』がどのような思想に支えられているか、ということについての見るべき論はほとんどなかったといってよい。ここではこの小説の最も肝腎な思想的背景について、いささか論じてみたいと思う。

まず『紅樓夢』の主人公賈宝玉がどんな人物として描かれているか、という点を探ってみなければならぬ。この小説では主要人物

が登場する前に、第二回の賈雨村と冷子興との会話によって、それらの人物に関する予備的な説明を行っている。ここで作者曹雪芹は、読者が賈宝玉を単なる女好き、色好みの色魔と見ないようにと、特に注意しているようである。そのためにまず、冷子興の口を藉りて宝玉に対する通俗な世間一般の見方を示し、賈雨村にそれを否定させている。

冷子興のいうところによれば、宝玉の満一歳の誕生日に、父親の賈政が彼の将来の志向を試すために、いろいろの物を並べて自由に取らせたところ、宝玉はほかの物には目もくれず脂粉や簪、腕環といった女の持物にばかり手を出したので、賈政はこの子は将来酒色の徒たるに過ぎぬと甚だ不機嫌であった。また、七、八歳になると「女の子は水で出来た骨肉、男は泥で出来た骨肉、ぼくは女の子を見るとすがすがしくなるが、男を見ると濁臭に息がつかまる」などというようになった。なんとこれは将来色鬼疑いなしではないか、いうのが冷子興の結論である。

これに対して賈雨村は冷子興の言葉をさえぎって、賈政を含めて人々は宝玉の本質を見誤って淫靡色鬼だとしているのだという。そのような人物については、多く書を読んで事を識り、加うるに致知格物の功、悟道参玄の力を以てする者でなければ理解することは出来ぬ、というのである。そういうだけあって、ここの理窟はいささか玄妙だ。大仁者は運に應じて生まれ、大悪者は劫に應じて生まれる。そして、清明靈秀は天地の正気であって仁者の秉るところ、残忍乖僻は天地の邪気であって悪者の秉るところである。太平無為の世には上は朝廷より下は草野に至るまで清明靈秀の気に満ちているので、残忍乖僻の邪気ははびこることが出来ず、深溝大壑の内に凝結しているほかはないが、これが風に揺られたり雲に推されたりして動き出し、ほんの少しでも逸出して靈秀の気に出合うと、正は邪を容れず、邪はまた正を妬んで両々相下らず、猛烈な争いを展開する。このようなややこしい気を秉って生まれた人物もあるわけで、こういう者は仁人君子にもなれず、大凶大悪にもなれない。これを億万人の中に置けば、その聡俊靈秀の気は億万人の上にあり、その乖僻邪謬にして人情に近からぬ態はまた億万人の下にある。このような人物は富貴侯公の家に生まれれば情癡情種となり、詩書清貧の族に生まれれば逸士高人となる。つまり賈宝玉はこの種の人物だというわけで、彼は富貴侯公の家に生まれたのだから「情癡情種」であるが、これは単なる淫靡色鬼ではなく、「聡俊靈秀の気は億万人の上にあり、乖僻邪謬にして人情に近からぬ態は億万人の下にある」

という一筋には片づかぬ人物なのである。「人情に近からず」というのは不人情の意味ではなく、常識外れといったところであろう。女の持物はかり好んだり、女を男の上に置くなどということは、すべて「不近人情」である。

買雨村はさらに買宝玉の「女の子は水で出来た骨肉」云々を甄宝玉の言葉をもって補っている。「女兒の二字は極めて貴く、極めて清浄なものであり、かの阿弥陀仏、元始天尊の両宝号よりもさらに比べられぬくらい尊いものだ。お前たちの濁口臭舌で絶対にいい加減にいつてはならない。それを口にしようとする時には、必ずまず清水、香茶で口を漱いでからでなければいけない」

買宝玉のこのような特質は、第五回、警幻仙姑によってさらに説明される。彼女は宝玉を「天下古今第一の淫人」だという。彼女のいうところによれば、この淫はいわゆる淫靡色鬼の淫ではなく「意淫」なのである。意淫は「ただ心に会して口に伝うべからず、神通して語達すべからざる」ものだというのだから説明はむずかしいわけだが「天分の中に生成した一段の癡情」であるというから、持つて生まれた癡情の性格だということは確かである。そして警幻仙姑は宝玉だけが「今独りこの二字を得」ているという。はなはだ例の少ないものである。

意と淫とは対照的な内容を持つ文字である。曹雪芹はこうした組み合わせを好んで用いる。真と仮、色と空、有と無、それから第一回、買雨村の言葉に出る正気と邪気といった類である。そして雪芹はこれらの概念をただ対立させるのではなく、「仮の真となる時、真も亦仮。無の有たる処、有も亦無」(第一回)の如く、両者を一つのものとして捉えようとする。宝玉の氣質は買雨村のいう、正気と邪気が相闘いかつ統一したものとしての「情癡情種」である。この見方からすれば、意淫は、意が極まることによって淫となり、淫は極まって意となる関係にあることになる。宝玉は太虚幻境で警幻仙姑から男女の事を授けられ、可卿とその事を行なった後、夢さめて現実世界にもどってから、襲人と再びその事を行なうのであり、意淫が形而下的な情慾を否定するものでないことを示している。と同時に、彼の女性に対する態度は、賈赦、賈珍、賈璉、薛蟠らのような「皮膚濫淫」の淫と同じく談ずることは出来ない。宝玉は女中が口につけた紅を好んでたべる。男たるもの、美しい女がつけた口紅を、許されるとしたらたべることを好まぬものはあるまいが、その時に、なんらやましい下心なく行動することはむずかしい。宝玉にはそういう下心がないのである。この淫の行動は、淫極まって意と

なっているのである。

もちろんこのようなことは「不近人情」で、常識では理解されない。だから第三回にあるように、人からは、

故無くして愁を尋ね恨を覓め、時有りて愧なるに似 狂するが如し。縦然皮囊好きも、腹内は原来草莽たり。潦倒して世務に通ぜず、愚頑 文章を読むを怕る。行為は偏僻たり性は乖張たり、那んぞ世人の誹謗を解せんや。

といわれる。「天下無能第一、古今不肖無双」ともいわれるのである。だから警幻仙姑がいうように「閨閣中に在りては固より良友と為る可きも、然れども世道中に於ては未だ迂闊怪詭たるを免れず、百口嘲謗し、万目睚眦す」ということになる。

宝玉は「閨閣中の良友」である。その限りにおいては身分の高下を問題にしない。晴雯の冷えた手を握ってあたためてやる（第八回）。寧国府で出た料理が晴雯の好物なので、晩に自分がたべるのだからといって届けさせる（同上）。襲人が乾栗がたべたいから剥いてくれといえば、きれいなものを選んで剥いてやる（第十九回）。第二十回では麝月の髪を梳いてやっている。このようなことは女性の尊重と見られがちだが、宝玉は女性を尊重しているわけではない。第四十一回、史太君が一同を従え、劉姥姥を案内して妙玉の櫺翠庵を訪れる。妙玉は史太君の求めに応じて茶を沏れる。相手が史太君だから、成化年製の極上の茶碗に老君眉の茶を沏れて出すが、史太君はそれを半分ほど飲んで、あとを劉姥姥に飲ませる。そのあとで、道婆が一同の使った茶碗を取片づけようとすると、妙玉は例の成化年製の茶碗を別におかせる。宝玉はそれを見て、妙玉がきたながって捨ててしまうつもりだと察する。そこで宝玉は、捨てるのはもったいないから、劉姥姥にくれてやるようにとすすめる。妙玉がそれを承知して、しかし直接劉姥姥に渡すのはいやだから、持って行ってあとで渡してくれと頼む。この時、宝玉がいう。「それは当然です。あなたがどうして彼女と話をして受渡しなどすることが出来ましよう。そんなことをしたら、あなたまでが汚れてしまいます」劉姥姥と話をしただけで妙玉が汚れてしまうというわけだ。女性なるが故に無条件で尊重しているのではないことは、これだけでもはっきりしている。

さらに第七十七回、婆さんたちが司棋を情容赦もなくつれ出してしまふのを見て、宝玉はいう。「奇怪至極なことだ、どうしてこの連中はいったん男に嫁入りしたとなると、男の氣に染って、こんなに馬鹿になってしまふのだろう。男よりもっと憎らしい」それを

聞いて婆どもが「とすると、女の子というものは全部よくて、人妻は全部悪いのですか」とたずねると「そうともさ」と答えている。ただ實際上、宝玉は祖母や母親をそんな風には見ていないし、王熙鳳や李纨をも人妻であるために駄目になってしまっているとも思っていない。秦可卿には別種の慕わしささえ強く感じている。つまり、意地悪で醜悪な老婆を嫌悪しているのである。劉姥姥には親しみを持っており、嫌悪は感じていないが、田舎の百姓婆だからきたないというのだ。要するに宝玉が尊重するのは、若く美しい女性に限るのである。

先にのべたように、宝玉が美しい女性に親切を尽くすのは、下心があるからではなく、その美しさに真心を捧げずにいられないからである。第四十四回、平児が賈璉、鳳姐の夫婦喧嘩のそば杖を喰って彼の部屋に避難して来ると至れり尽せりの大奉仕をする。「宝玉とすれば、常日頃、平児が賈璉の愛妾であり、かつ鳳姐の心腹であるところから、肯て彼女に近づこうとはせず、そのために心を尽くすことが出来なかったのを、いつも恨事だと思っていた」からなのである。というのも平児が「極めて聡明で極めて清俊な上等の女の児で、ありきたりの俗蠢拙物とは比較にならぬ」女性だから、親切を尽したいと思っていたというわけだ。それが思わぬ騒動で、いささか一片の真心を尽くすことが出来たのは「今生意中思わざりし楽事」だったと大満悦なのだ。親切を尽しておいて、その上でどうしようなどというわけではない。親切が出来たことで満足なのである。そして、賈璉が自分一人の淫楽のみを知って女性を遇する道知らぬことを思っ、平児のために独り涙を流す。それも襲人らがちようど部屋にいないので、思う存分に泣いたというのだから、念が入っているのである。

それくらいだから、宝玉は遊び半分に女を相手にすることには反対である。第十九回、宝玉は彼の下僕の茗烟と寧国府の女中との濡れ場に行き合わせてしまう。女中が恥じてその場を去ってから、宝玉は茗烟に彼女の年をたずねるが、茗烟ははっきりした年を知らない。「あの子の年さえ訊いたこともないので、ほかのことはまして知りはせんだらう。可哀そうに、あの子はお前を見そなったんだね」宝玉は弄ばれた女中に同情するのである。

宝玉は若く美しい女性を崇拝するのである。この意味では身分の上下を問題にしない。親切にするだけでなく、その身分に高下の

あることを不合理だと思ふ。同じく第十九回、宝玉は襲人とその家に訪ね、彼女の従妹に会って感心し、後で襲人にいう。「あのような人こそ、こういう大邸宅に生まれるにふさわしいのだ、それがどうだい、ぼくみたいなこんな濁物がかえってここに生まれたのだからね」

だが、宝玉は女にだけ惚れこむのではない。秦可卿の弟秦鐘は宝玉の親友になる少年だが、彼らの間の友情は単なる友情とはいえないものがある。宝玉は秦鐘に会った途端、心中になにかを失ったように、しばらく呆然として自失してしまい、こう考えるのである。「天下にはこのような人物がいたのか。こうなって自分を見直すと、泥豚か瘡かき犬同然になってしまう。恨めしい、ぼくはどうしてこんな侯門公府の家に生まれたのだろう。もし寒儒薄宦の家に生まれていれば、とくに彼と交際出来ていたろうし、生まれた甲斐もあったというものだ。ぼくはこんなに彼より尊貴の身分にあるが、なんとこの綾錦紗羅は、この枯れ棒っ代を包んでいるにすぎないのだ。美酒羊羹もただぼくという糞窟泥溝を埋めるにすぎないのだ。富貴の二字が、料らざりき、ぼくのために茶毒されようとは」

宝玉にとっては、富貴は美しいもののためであるのである。

宝玉と秦鐘は一緒に塾へ通ふことになるが、塾では二人の仲がたちまち評判になってしまふ。また、この塾の生徒に渾名を香憐、玉愛とつけられている二人の美少年がいる。宝玉と秦鐘はこの二人を見ると、恋慕の情を禁じ得なくなる。香憐と玉愛の二人も思いは同じで宝玉、秦鐘に想いを寄せ、かくて四人は互いに目顔に物をいわせて心を通わせているといった塩梅である。

また、第二十八回、馮紫英の招宴で宝玉は小旦の蔣玉函に出会い、二人席を外した折に、宝玉は玉函あてやかにやさしい姿にすっかり参つて、固くその手をとって語り合う。以上見て来た通り、宝玉の愛情は必ずしも女性にばかり向けられているわけではない。ただ共通していることは、いずれの場合にも相手が良いということである。つまり宝玉は女性はもちろん、男性に対しても、美しいものに敬意を払っているのだ。敬意を表するだけではない。彼自身、美しきものの前に拝跪し、富貴も栄華も美しいものに従属せねばならぬと考える。賈宝玉は唯美主義者なのである。

美の標準は当然、精神面にも及んで行く。それはなにも束縛されぬ自然な精神の発露とでもいったらよいかもしれない。これは当然のこととして、日常の生活と抵触する。買家という貴族の家に生まれた宝玉は、一般的な意味での高い教養と、さらには統治者として官途につくための学問とを要求される。形式的な生活の規律を強要される。それは束縛を厭う宝玉が目撃として憎んでいるものである。そしてそれは当然、儒教的なものである。宝玉が反儒教的に見えるのは、そのためだ。しかし宝玉は根本的に儒教を否定しているのではない。第三回、宝玉は「四書以外は杜撰なものが甚だ多い」といつている。四書は高く評価しているわけである。孔子や孟子を否定しているのではない。

宝玉は君主に対する忠誠も否定してはいない。第三十六回で彼はいわゆる「文死諫、武死戦」を否定しているが、それはそういう忠臣とか良将とかいわれる連中が、名を売るために選んだ道である場合が多いからである。「必ず昏君があればこそ彼は諫めるのではないか。それを名を求めることばかり考えて、ひと思いに死んでしまつては、将来君主を何の地に棄てんとするのか」といつわけだ。「彼等はちよつとばかりの本を読んで胸の中にしまひこみ、もし朝廷に少しでも落度があれば、さっそく無闇と談じたて、やたらに諫めだてをして、忠烈の名を求めることに専心している……」ともいつている。朝廷や君主を否定してはなくて、多くの文武の官僚の、名目は立派でも、行動がそれとらばはらで、真心から出たものでないのを非難しているのである。皇室、朝廷ということを問題にするなら、宝玉は第六十三回でもこれを賛美している。「幸いにもわれわれは福に恵まれて、当今の世に生を享け、大舜の裔なる聖天子の功德仁孝は赫々として天に格り、天地日月とともに億兆も朽ちることがない」「今や四海賓服し、八方寧靜で、千載百載、武備を用いることもない。われわれは一戯一笑といえども、これをたたえるべきで、それでこそ太平の御代に生を享けたことに背かぬといえるのだ」

文死諫武死戦の条で問題になっているのは、皇室や忠誠ということよりは、死の美しさという点である。それは彼がこれにつづいて語る理想の死と対照すると、いっそうはつきりする。ついでに断わっておくと、彼は襲人と話をしているのである。「たとえば今が今、ぼくが幸せにも死ななければならぬとすれば、君たちがいるうちに死んでしまいたい。そして君たちがぼくのために泣いて流す涙が大河となって、ぼくの死体をただよわせ、鴉や雀も来ないような幽僻の地まで運んで行き、風の吹くままに風化して、そのままもう再び人の世に生まれないとすれば、それこそぼくにとっては時を得た死に方なのだ」

宝玉が世間的な交際を嫌うのは、それが心からの交わりではなく、外面的な形式的往来でしかないからである。「宝玉はもともと士大夫といった類いの男どもと応接するのは気乗りがしないし、衣冠を正して慶弔の往来をすることなどは最もニガ手である」(第三十六回) 宝玉が学問をするのを嫌うのは、その学問なるものが出世の道具にしかすぎないからだ。宝玉が怠けているのを宝釵が見ると、こんなことをいう。「せっかくの清浄潔白な女の子までが名を沽い誉を釣ることを学んで、国賊禄鬼の流に入るとは。これというのもすべて前人がいらざるところに事を起し、なんのかのと偉らそうなことをいいたてたからなのだ。もとはそれも後世の鬚眉濁物を導くためではあったのだろうが。どうもぼくはいい生まれ合わせではなかったらしい。立派な女性たちまでがこの風に染まって、あたから天地鐘靈毓秀の気を損なっているのだから。それで禍いが古人にまで及ぶことになるのだ。四書をのかして、そのほかの書物は焚いてしまった方がいい」(第三十六回) この種の学問は清浄潔白な処女を汚すことになるからいけない、清らかなすぐれた心を損なうものだからいけないのである。学問をして官吏になるような連中は国賊であり、禄盗人なのだ。宝玉が黛玉に強く惹かれるのは、彼女が「幼ない時から立身揚名等の言葉で彼を諫めたことがない」(同回) からである。要するに、ここでも心の美ということが問題になるのだ。

宝玉の理想の生活は、学問などせず、女の子にまじって楽しく遊び暮らすことである。誰しもそれに異存はあるまいが、しようと思つて出来ることではない。まして礼のやかましい当時にあつては、まったく不可能なことだった。稀なる幸運で、祖母の史太君が宝玉を溺愛して手もとを離さず、閨閣に出入自由ということになつていたのである。これに対する唯一の邪魔は父親の賈政であつた。賈

政とすれば父親として息子を然るべく教育する義務があるから、史太君のやり方が気に入らない。ただ、母のすることなので、やむを得ず口出しをしないでだけである。それだけに、宝玉の放埒の度がすぎた時には、折檻もきびしくなる。第三十三回がそれで、宝玉は血まみれになるまで打ちのめされる。

賈政を怒らせた原因は二つある。一つは宝玉が母親の王夫人づきの女中金釧児にたわむれているところを、王夫人に見とがめられ、金釧児は叱責されて邸を追われ、それを恥じ憤って井戸に身を投げて自殺したのである。もう一つは宝玉が親交を結んだ小旦の蔣玉函が忠順親王寵愛の役者で、玉函が行向をくらましたのをさがすため、親王府の長史が宝玉に問合せに来たのである。理由はどうであれ、結果的には女中を死に至らしめ、役者風情と深い交際をしていたのだから、打たれても致し方のない不行跡だ。それにしても賈政の折檻は常識外で、宝玉は半死半生の有様になり、史太君にようやく救われる。

ところが、宝玉はそれに懲りるところか、女たちが心配してチャホヤするのに大満悦である。宝釵が見舞いに来て意見をし、あんな有様では「わたくしたちも見ていて胸が痛くなります」といってから、いすぎたと気がついて思わず頬を赤く染めるのを見て「思わず心中はなはだ晴れやかになって、痛さが九霄の雲の彼方へ飛んでしまい、心の中で思うには「ぼくがちよっとばかり打たただけで、彼女らが一人々々こうしてあらわにいたりや悲しみを見せてくれるのは、味もあり、見るにも堪え、憐れでもあり、尊敬の気持ちも起るといふものだ。もしもぼくがひよっと横死でもしてしまつたら、彼女たちはいったい、どんなに悲しむだろう。この調子だとしたら、ぼくがひよっと死んでも、彼女たちがこうしてくれるなら、たとい一生の事業がすべて水の泡になったとしても、惜しむには足りない」(第三十四回)などと思いにふける有様である。宝玉にとっては、美しい彼女たちの一片の同情を得るためなら、命を投げ出しでも惜しくはないのである。この美しい女の子たちに囲まれて、その日その日を楽しくすごすのが宝玉の理想であるのは当然だろう。この折檻の度がすぎたために賈政は史太君から手痛くやりこめられて宝玉に手出しが出来なくなり、また間もなく学政として地方に赴任してしまふ(第三十七回)ので、宝玉は勉強をほっぽり出して思う存分に遊ぶことが出来るようになる。心の欲するがままに暮すのが、彼の美的生活なのである。

なんら効用を持たぬ美に絶対の価値をおく賈宝玉の思想や行動に、建設的、積極的なものがなにも一つないのは当然のことである。第三十一回には、宝玉の物に対する考えがのべられている。晴雯にいうのである。「割りたければ割るがよい。こういった物というものは、人が使うためにあるにすぎない。おまえはこのようにしたい、ぼくはこのようにしたいとおのおの好みが違うのだ。たとえこの扇子は元來は扇ぐためのものだが、おまえが破いて遊びたければそうするがいい。ただ、怒って腹いせにやっちはいけないのだ。それから杯や皿にしても、もともとは物を盛るためのものだが、おまえがその音を聞くのが好きなら、わざと割ったってかまわない。ただ、怒って腹いせにやっちはならないのだ。これがつまり物を愛することなのだ」

金釧児の死に、宝玉は責任がある。第三十回、宝玉が王夫人の部屋に入って行くと、彼女は涼榻の上に横になって金釧児に足を叩かせている。夏の暑い日のことで、王夫人は眠っているようだし、金釧児も目を閉じて、ふらふらしている。宝玉はふと「窓々として捨て難いような気持になって」近寄って金釧児にたわむれる。別段怪しからぬことをいっただけでもなければ、したわけでもない。宝玉は金釧児を自分の部屋づきに変えてくれるように母に頼むといい、彼女はそんなにあわてることはあるまいというようなことをいった程度のことである。が、当時とすれば、これだけで怪しからぬことであつたには違いない。王夫人には金釧児がわが子を誘惑する不埒千萬な女中と映つたのだ。やにわに起き上ると金釧児に平手打ちを食わせ、きびしく叱責して屋敷から追い出してしまった。揚句のはてに彼女は自殺したのである。宝玉の方は王夫人が起きたのを見ると、雲を霞と逃げ出してしまふ。そして、もちろんこのことが金釧児の命にかかわるような大事にまで発展するなどと思つていなかったことはたしかだが、庭で子供芝居の女の子がしきりに地面に字を書いているのを見て立ち去り難い気持になつたりしている。金釧児のために王夫人のところへ謝りに行くようなこともしない。彼女の死を聞いても「たつた今、身命をなげうって金釧児のあとを追うことが出来ないのを恨めしく思つた」(第三十三回)にとどまり、また金釧児の生日にひそかにその霊を祭つたものの、その辺が精々のところで、積極的な贖罪の行動はなにも一つとりはしないのである。宝玉が愛しているのは黛玉である。寝言にも「和尚や道士のいうことがどうして信じられよう。なにが金玉姻縁だ、ぼくは木石姻縁といたい」(第三十六回)というくらいで、その意味では宝玉の心の中で宝釧は問題になつていない。容貌の美しさでは、黛玉と宝

宝釵とは対照的な型ではあるが優劣はつけ難い。その点では宝玉は宝釵を十分に評価しているし、その美しさに惹かれもしている。第二十八回、宝玉は宝釵の肉づきのいい雪のように白いやわらかな臂を見て、これが黛玉の腕についていたなら、ひよっとして撫でること出来たかもしれないのと残念に思う。そう思って宝釵を見ると、黛玉とはまた違った一種なまめかしく意気なところがあるので、思わずポーツとなってしまふ。また先述の第三十四回では、宝釵の顔を赧らめて羞ずかしげな様子を見て、半死半生になるまで打たれた鞭の傷の痛さも忘れてしまふ。宝玉は美に差別はつけないのであって、その点では黛玉の美も宝釵の美も同等なのである。さればこそ宝玉に恋をする黛玉は気が揉めて、いつも宝釵を意識せざるを得ないことになっている。

それでいながら、宝玉が愛し、恋をしているのが黛玉だけだというのは、黛玉と宝釵の心の美の問題があるからである。宝釵は俗世的な常識の物主であり、つまりは心の純粹さにおいて曇りを帯びていることになる。これも先述の如く、宝釵が宝玉の怠けているのを意見すると、あたり天地鐘靈毓秀の気を損なっていると歎く(第三十六回)わけである。第三十二回、襲人の言葉の中でも、宝釵が宝玉に少しは経世の学にも精を出すようにと忠告しはじめると、宝玉はそれを聞くなり返事もせずには部屋を出て行ってしまい、宝釵は話の途中でつぎ穂を失って赤い顔をしてしまったとある。そこへ行くと黛玉は第三十四回で宝玉の傷の見舞いに来て、彼が眠っているのを眼にいっぱい涙をためて見つめているだけなのである。黛玉は文学少女でその才をかくそうともしないが、宝釵は才を持ちながら、表面には出すまいとする。第三十七回でも宝釵は糸つむぎや針仕事などの「女工」がそれに次ぎ、詩詞等の才華はあってもなくてはすなわちこれ徳」という諺を引き、女にとっては貞淑が第一で針仕事などの「女工」がそれに次ぎ、詩詞等の才華はあってもなくてもよいものだといっている。第四十二回では、黛玉が酒令の時に『牡丹亭』と『西廂記』の中の文句をいったのを、宝釵があとでたしなめ、女は字を知らぬ方がかえってよい、自分たちは針仕事や糸つむぎが出来ればよいのだといっている。また、ここでも詩詞の類は女の本分ではない、男にとってさえ本文ではない、男には経世済民の学こそ大切だ、といっている。このようなところは、買家の人々の目に黛玉よりも宝釵の方が嫁としてふさわしいものに映ったとしても、宝玉にとっては惜しむべき瑕であり、黛玉と同列に置くわけには行かぬところなのである。

以上見て来たように、賈宝玉の唯美主義的な思想は、実際の生活の上になんら積極的な作用をなし得ないものである。宝玉の理想はいつか社会の利害との衝突を起すべきものであり、その場合の結果ははっきりしている。宝玉はそのことに気がつかないし、また気がつきたくもない。第三十一回「宝玉の性質はただ常に相集うことを願ひ、さつと散つて悲しみを添えることを恐れる。たとえば花はいつても咲いているようにと願ひ、一時に散つて趣を欠くことを恐れる」のである。いかに恐れても、この結果に彼ははずれ直面しなければならぬ。花が散つて行くのを見なければならぬ。晴雯は賈府を逐われる。迎春は不幸な結婚をする。賈家には暗い翳がさしはじめ、それは没落へとつながって行く。黛玉は宝玉と結ばれることなく、病いに斃れる。曹雪芹の八十回以後は失われたとはいへ、それらのことはすでに各處に暗示されている。宝玉の美は一つ一つ滅び去って行く。彼は無常を悟つて出家するのである。「紅樓夢」はこの咲きはこり妍を競つた美しきものが、はかなくも散つて行く姿を描いたものであり、さればこそ「紅樓の夢」の題名を持つのである。この題名は第五回の「紅樓夢」曲から出たものではあるが、他の『石頭記』『金陵十二叙』等の曲のない題名を抑えて後世に残したのは、美的な表現によるだけではなく、これがよくこの小説の全体をいい現わしているからである。

このような『紅樓夢』が、色即是空の色合いを持つているのは当然だが、同時にそれはこの小説の構成の骨格をもなしている。賈宝玉およびここに登場する美しい女性たちは、すべて天上の世界から下つたものであり、この世を去つて、また天上の世界へ帰って行くことになっている。色の世界は、空の世界によって支えられているのである。この世で滅び去つた美は、天上の世界で永遠の生命を持つ。『紅樓夢』の色空は、作者のはかない抵抗の姿勢をもあらわしているのである。